



# 柳原白蓮

永畑道子

柳原白蓮（燁子）の取材を始めたのは、十七年前。それまで教育関係の取材が多かったのだが、ひとつの区切りをつけ、『野の女―明治女性生活史』、『炎の女―大正女性生活史』を書いたそのあとに、私の母のふるさと博多を起点に現場を歩いた。

幼い日から寝物語にきかされた白蓮さんの家出である。母は歌詠みの父にあこがれ、貧しい欄間彫りの身であったひとを慕って熊本へ嫁いできた。父はそのころ、水獐派でようやく新聞社の取材などに応じる中堅の歌人に、なっていたようである。

母は、炭鉱王の伊藤伝右衛門に絶縁状をつきつけて出奔した白蓮さんのことをしばしば語った。

「雪が降っていた博多の町、雪駄をはいて、紫の御高祖頭巾姿で出ていかれた。億万長者といわれた家から身ひとつで。女の決意の潔い家出……」。

優しくて、烈しいものを秘めていた母のあこがれであった。

恋愛事件相次いで、やがて戦争への道をたどる大正という時代。

その歴史を調べながら、白蓮の名は私のなかに深くしみついて、いつかはこの人のことを書きたいと思い、一九八〇年夏七月の博多の町、山笠の準備がととのい、祭の太鼓が身体を突き上げるようにひびいてくるとき、取材に踏み出したのである。

母から聞かされた白蓮さんの姿は、少しずつ、取材の事実のなかで変わりつつあった。

われはここに神はいづくにましますや星  
のまたたき寂しき夜なり

踏絵もてためさるる日の来しごと、歌  
反故いだきたてる火の前

或時は王者の床も許さじとまきしかひな  
のこの冷たさよ

美しう君に背くといふ事もいつか覚えし  
悲しき誇

ゆくにあらず帰るにあらず居るにあらず  
生けるかこの身死せるかこの身

白蓮の第一歌集『蹈繪』のなかの歌である。「われはここに神はいづくに」の歌は、その冒頭に置かれている。いずれも、かなりの力量の歌。

『蹈繪』は一九一五（大正四）年三月五日、佐佐木信綱の「心の華」叢書として出された。やや小ぶりの、濃いグリーン色の表紙に日輪が描かれ、そのなかに殉教を意味するアルファベットの文字。扉絵には遠く西洋風の家々、木の十字架にキリストとみまがう若い男が隣



若き日の白蓮。

となり、手前に、首をかしげて涙する女。——竹久夢

二の絵である。佐佐木信綱の言葉が、そのあとに記されている。

白蓮は藤原氏の女なり。「王政ふたたびかへりて十八」の秋ひ

蓮

むがしの都に生れ、今は遠く筑紫の果にあり。「緋房の籠の美しき鳥」に似たる宿世にとらはれつつ、「朝化粧五月になれば」東紅の青き光をなつかしむ身の、思ひ余りては、「あやまちになりし軀」の呼吸する日日のろはしく、わが魂をかへさむかたやいづこと、「星のまたたき寂しき夜」に神をも志のびつ。……この蹈繪一卷は、作者が「魂の緒の精をうけ」てなれりしものなり。……その夢と悩みと憂愁と沈思とのこもりてなりしこの三百余首を貫ける、深刻にかつ沈痛なる歌風の個性……紫のゆかりふかき身をもて西国にあなる藤原氏の一女を、わが蹈繪の作者白蓮として見ることは、吾等の喜びとするところなり。……

大正四年一月

佐佐木信綱

白蓮の名は、信綱が与えた、と伝えられている。信綱は明治における和歌革新の旗手であり、落合直文、与謝野鉄幹らと並んで、人間の心情をあるがままにうたいあげる「短歌」を確立した。東大で『万葉集』を講じていた。その名声を慕って、文京区西片町にあった佐佐木邸の前は、竹柏園歌会に集う上流婦人の姿と人力車が、門外にまであふれていたという。

この大正四年のころ、信綱を支えたのは、石樽辻五郎、当時破調の歌で浪漫派の先駆けとなる石樽千亦であった。

### 北の海余市の林檎

見めこそはよからずといわめ

余市の林檎

石樽千亦



山風は  
枯木立吹き 枯野吹き 海に走れり  
船出すな今日

石樽千亦

白蓮こと柳原燐子は、若くして外務大丞をつとめた華族・柳原前光と、柳橋芸者のおりようとのあいだに生まれた。

おりようは、幕府最初のアメリカ使節団の代表、新見豊前守正興の娘であり、維新後の没落で、おりようとその姉は芸妓となった。

燐子は誕生七日に、前光の正妻である初子に引き取られ、そこからすぐに品川在の種物屋、豊かな乳をもつ増山くにもとへ里子に出された。

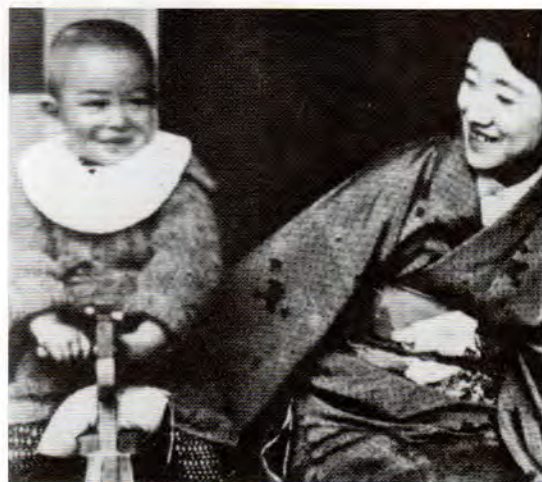
九歳のとき、貧しい公卿の北小路家へ養女に。父柳原前光は一八九四（明治二十七年）年、日清戦争が勃発した秋に没している。

母おりようは、燐子を生んだあと病気がちとなり、早くにこの世を去った。

燐子は肉親の縁を断たれ、それでも北小路の家で、貧しいながら花鳥風月、歌の手ほどきを受けた。

ただ何も知らぬ幼い燐子には、北小路家の、燐子より七歳年上の資武と夫婦になる約束が、すでに決められていた。燐子は、「将来妻となる身ではないか」と、否応なしに資武に犯される。そのとき、自分が芸者の子であったことを知った悲しみ。やむを得ぬ結婚でひとりの子を産み、五年間、愛のない交わりに耐えた。

ついに、燐子は柳原家に帰る。破婚の燐子は、出戻りを恥じる本妻初子によって、隠居所へ。秘かに腹違いの姉信子が燐子を訪ねて、



長男・香織とともに。

文学書を、古典を、差し入れてくれた。日露戦争まっ最中のとき、鉄幹、晶子、明星派歌人の情熱的な歌を、燐子は読んだ。

やがて東洋英和に二十四歳で入学。姉信子に連れられて、佐佐木信綱の門下に入り、三十一文字の入口に、ようやく立ったのである。

福岡の炭鉱王、伊藤伝右衛門との結婚は、明治四十年三月であった。伝右衛門は日の出の勢いの実業家であり、名誉職を連ね、正妻ハルが亡くなったあとの身辺を、きれいにし、新しい妻を待った。燐子は二十七歳。はかない風情の女である。東京から福岡へ帰る途中の京都で、伝右衛門の芸者遊びが始まっていた。燐子は目の前が暗くなる思いだった。別世界に住む男と女。ここから『踏繪』の舞台が始まる。後戻りはできぬふたり。

燐子は短歌のなかに、人として蘇った。気ままに恋し、姦淫する自由を求め、伝右衛門を踏み台として、悲劇の女・白蓮があらわれ、てくる。

明治末から大正四年にかけて、「心の華」には、叩きつけるような魂の歌が届いた。そして第一歌集『踏繪』発刊。「紫の深き愛い」と、



信綱は受けとめた。白蓮は第一歌集によって、いっきに最前線の歌詠みとなり、幻か、うつつか、現実と符合する世界を、歌に託した。

誰か似る鳴けようたへとあやさるる緋房  
の籠の美しき鳥

よるべなき吾が心をばあざむきて今日も  
さながら暮しけるはや

寂しさのありのすさびに唯ひとり狂乱を  
舞ふ冷たき部屋に

わがために泣きます人の世にあらば死な  
むと思ふ今のいま

伝右衛門は、妻である燐子が何を詠むのか、関心はなかった。実業家であり、頭脳明晰な伝右衛門である。この『踏繪』制作の費用



伊藤家の白蓮。

六百円を、惜しみなく出している。歌心の一片も持ち合せぬ伝右衛門ゆえに、歌集はこともなく世に出た。

白蓮となった燐子は、虚々実々のペールのなかで、容赦なく目の前の事象、思いを歌い続けた。白蓮にとってもっとも辛いのは、夜の交わり。京都からおゆうという女を呼び寄せ、伝右衛門のそばへ。やがて伝右衛門に本気にひかれていくおゆうを、燐子はみまもる。自ら招き寄せた地獄だった。おゆうが胸を病んでからは、その姉のお里を招いた。そして白蓮は詠んだ。

百人の男の心破りなばこの悲しみも忘れ  
はてむか

吾なくばわが世もあらじ人もあらじまし  
て身を焼く思ひもあらじ

妬みせで海なす胸に広々と人の恋をもよ  
しとたたへぬ

天上の花の姿と思ひしはかりねのやどの  
まぼろしの華

風もなく雲も動かず天地の寂寞の中の胸  
のとどろき

風に鳴る葉ずれの音もさびしけれ逝きに  
し人の声もまじるか

女とは世とは道とはうきつらき生ける限  
の謎にあらじか



妻妾同居は、明治の高官たちのごく日常の習いであり、当時の新律綱領もこれを堂々と認めた。

ことに宮中の習いに染んだ燐子である。

父前光の妹にあたる愛子は、たまたま御所が火事で焼けて、赤坂離宮に明治天皇と皇后が身をよせた折に、そこで働く愛子を天皇が見染め、皇后は天皇のための側室を自ら用意して、愛子はやがて大正天皇の生母となっていく。

伝右衛門のもとで恋歌を詠み続けた燐子に、かりそめの恋はいくらでもあった。あるとき、燐子の第二の人生を作る宮崎滔天の息子、東大新人会のリリーダーでもあった宮崎竜介があらわれる。



宮崎竜介（左）、白蓮（右）

竜介は、劇作に乗

り出していた燐子の

もとへ、ひとりの編

集者として訪ねてき

た。その夜彼は、別

府のあかがね御殿、

伊藤伝右衛門の別荘

に泊した。別世界の

の思想に満ちた若い

竜介と語りあい、燐

子は、寂しきの極み

の心を寄せていく。

一九二一（大正十）

年初夏。身体の上で

潔癖であった白蓮の日常が崩れ、宮崎竜介と京都で落ちあい、初めての愛が結ばれた。子をはらみ、そのしるしに気づいた白蓮は身辺を整理して、伝右衛門からもらったものすべてを返し、身ひとつで恋人竜介の元へ奔る準備をした。

秋・十月、夫と上京した東京の宿で、商用終わった夫を東京駅に見送り、そのあと竜介のもとへ。そして、中野にある弁護士の家にも身をかくした。大阪朝日紙上で、女の側から男に向かって初めて縁を絶つ絶縁状が公開されたのは、十月二十二日付朝刊である。

君に会ひ泣くべき時を命にて秋の七度生  
きてゐしかな

美しう君に背くといふ事をいつか覚えし  
悲しき誇

大正期をふうびした白蓮事件から、三十余年が経った、一九五三（昭和二十八）年秋十月。私はうつつの柳原白蓮女史の前に座っていた。

かつて白蓮事件が起こる前、きわめて親交あったという伊藤盛一氏、事件当時福岡日日新聞の若手記者であり、事件直後に朝日新聞に移り、この取材のときは熊本日日新聞の論説主幹、私にとっての上司である方と、白蓮女史とのインタビューを、私は取材していた。ハスキーで伝法な江戸下町のことばが混じる。小柄でなで肩、雪のような白髪。床の間に生けられた小紫のあやめのように、匂いたつ白蓮さんの実像であった。

博多に、あの出奔のときから初めて、立ち寄りられたという。そして宮崎民蔵、寅蔵（滔天）兄弟追悼の前夜祭に出られるための、熊本入りであった。

このとき熊本日日新聞にいただいた歌二首がある。

盛りなるほこりもやがて生終へて土にか  
へるか春の花片

緋牡丹のさかり過ぎたる危ふさに似ると  
言へども人うべなはず

そして福岡では次の歌が詠まれている。

うきものと思ひしは昨日の夢なりき海は  
大きく天につらなる

捨ててきて三十余年筑紫路の町のあかり  
はものいふごとし

旅にきて秋のそよ風身には沁むちくしは  
我に悲しきところ

歌の力はいささかも衰えず、どんなに遠くへ出るにも、常に本と書の道具を携え、夜は補聴器をはずしてひとりの世界にこもり、勉強を続けた白蓮女史である。

やがて視力を失い、一九六七（昭和四十二年）二月二十二日、愛する宮崎竜介氏にみとられて、この世を旅立たれた。八十一歳。遺された歌が、竜介氏によって紹介されている。

# 白蓮 柳原



晩年の竜介と白蓮。

月影はわが手の上と教へられさびしきこ  
とのすずろ極まる  
そこひなき闇にかがやく星のごとわれの  
命をわがうちに見つ

『恋の華・白蓮事件』として約二年間に及ぶ取材を本にしたのは、一九九〇年春。白蓮の歌の粋は、第一歌集『踏繪』にすべて尽くされていていることを、おびただしい歌群のなかで感じつつづけている。

（文中敬称略）

（ながはた・みちこ 作家、熊本近代文学館々長）